

# 相續税ト財産課税 (二、完)

神 戸 正 雄

## 第二段 相續税ノ課税結果

(一) 相續税ガ實ニ於テ財産ヲ捕捉スルトイフタカラトテ、必スシモ此ガ爲メニ國家ガ財産元本ヲ侵蝕スルトハ限ラナイ。其ノ斯ガル結果トナルヤ否ヤハ、結局(1)相續税ノ高サ(2)他諸税ノ高サ(3)一相續ト次ノ相續トノ間隔ノ長短(4)納税ノ爲メニ與エラルル猶豫及特典ノ有無大小(5)相續ノ偶然度ノ大小(6)國民ノ性能等ニカカルコトデ、一概ニイフコトヲ得ヌ。即チ先ツ相續税ガ高ケレバ財産元本侵蝕ノ恐ガ大イガ、彼ガ低ケレバ此ノ恐ハ少ク(註一四)、相續税ガ可ナリ高クトモ、他諸税ガ低ケレバ、其ガ所得ヨリ出サルルコトニモナリ易イガ、他諸税ガ高イトイフト到底財産ヨリ出サルルノ外ナキコトトナル。又一相續ト次ノ相續トノ間隔ガ相當ニ永ク、例之普通ノ一代タル二十年二十五年又ハ其ヨリモ長イ場合ニハ、可ナリ高イ相續税例之百分ノ二十五(註一五)、位ノテモ、能ク分散セラレテ所得ニヨリ出サルルコトニナル(註一六)。即チ百分ノ二十五モ二十五年ニ分散スレバ一年當リ百分ノ一、其ニ若干ノ利子ヲ見積リ加フルモ百分ノ一ヲ超ユルコト太シテ多クハナイ。併シ夫ノ間隔ガ短ケレバ財産元本ヨリ出サルル外ナキコトニナル。尤モ斯カル場合即チ

短キ時ノ間ニ再度相續ノ行ハルル場合ニハ通例免又ハ減税ノ特典ガ行ハルル(註一七)、例之日本ニテモ五年以内ノ二度目ノ相續ニハ全免、七年内ノ二度目ノ相續ニハ半減ノ特典ヲ與エ、及年以上ヲ過ギテ二度目相續ノ起ツタ場合ニ初メテ全額賦課トナル。斯クナレバ財産ヲ侵蝕スルコトハ少ク(註一八)、此等ノ特典ガナケレバ勢ヒ財産侵蝕ノ場合ヲ生ズルコト多カラザルヲ得ヌ。其他納稅上猶豫期間ヲ與フルコトガアリ(註一九)、此ハ日本ニモアルガ、然ツナレバ其間ニ所得ヨリ稅ヲ拂フノ途ヲ諱ジ、財産元本ヲ賣却セズシテ濟ムコトトモナリ得ル。ガ此猶豫ガ與エラレスト、遂ニ財産元本ヲ侵スコトニモナル。又其相續ガ父子夫婦間ノ場合ノ如クデアレバ偶然度ガ少イカラ、相續人モ何トカシテ財産元本ヲ維持シテ納稅セント苦心努力スル傾ガ大イガ、遠親者無親族關係者間ノ相續デアルト、偶然度ガ大イカラスカル苦心努力ノ鈍キ傾ガ大イ。更ラニ一般ニ國民ノ性能ガ奮勵努力的ナルヤ否ヤニモカカル。國民ノ性能サヘ勇健デアレバ、少シ位高イ相續稅デモ財産ヨリデナク、優ニ所得ヨリ出スコトニナリ得ル又ハ斯クナルヤウニ努ムルコトトナル。(註二〇)

併シ國民ニ此性能ガ缺クルトキニハ此稅ハ兎角財産ヨリシテ納稅サルルコトニナルノ傾ヲモツ。  
(註二一) へつけるハ相續税ハ先ツ以テ形式的ノ財産税デアル。併シ稅率ガ高クナルトキハ實際ノ財産税トナル。何トナレバ此ガ資本財産ノ成分ヲ併吞スルカラトイヒ、こゝんハ特ニ遠親等ノ處テハ通例相續財産ノ全額ノ頗ル高キモノヲ取り、此ニ全ク確カニ實質上ノ財産課税ガアルトイヒ、ほんめろすはいむハ目下行ハルル稅率ノ高サテハ此稅ノ一般ノ特徴トシテ此ガ相續財産ヨリノ所得ヲ要求スルコトニ限ラナイデ、相續財産其モノヲ稅源ト見ルモノトイフコトヲ得ベシトイフ。而シテ

ゑかーニ依ルニまらつへんべるぐハ適度ナル相續税ハ資本成形ヲ妨ゲナイトイフ。<sup>19)</sup>

(註一五) 彌延ニテ百萬馬克ヲ超ユル相續財産ニシテ遠キ親等ニ行クモノニハ百分ノ二十五ヲ課ス<sup>20)</sup>——尤モあんどろーかーに  
ぎーハ最大財産ノ場合ニハ百分ノ五十二モトホルコトヲ辯護シタ。<sup>21)</sup>

(註一六) へつげるハ此税ガ資本破壊トナラサルノ理由トシテ、二ノ租税給付ノ間ニ通例人一代ノ期間アルコトヲ擧グエーべる

ひハ此税ニ於テ國民經濟ヲ紊ル所ノ有害ナル資本破壊ニツイテハ一ノ徵税ヨリ次ノ徵税マアニ多クハ數年アルコトニヨリ眞  
面目ニ語ルコトハ出来ナイトイフ。<sup>22)</sup>

(註一七) こんらーじハ同一財産ガ短キ期間内ニ數回相續ニ現ハルルトキハ宥恕ヲ行フヘキモノトイフ。<sup>23)</sup>

(註一八) 日本テ家督相續ノ最重キ負擔ノ場合ハ  $\frac{1}{100} \times 100 \times 100 = 100$  遺產相續ノ最重キハ  $\frac{1}{100} \times \frac{1}{100} \times 100 = 0.01$  過ギス。

(註一九) ぶあいふあーハ政府ハ相續税ヲ一度テナクシテ、年賦ニテ數年ニ亘リ徵收スルコトニヨリ、資本ノ蒐集又ハ貯蓄ノ刺  
戟ヲ高ムルコトヲ得ヘシトイヒ、しるるハ固定資本ノ場合ニハ此税ノ支拂ガ税率ノ高サニヨリテハ數年ニ分配サルルヲ得  
ルコトナルデアラウトイヒ、ろつしあーモ亦タ財産ガ土地、農業又ハ營業ニ固定セラレ其回收ガ困難又ハ全ク不能ナル處  
デハ人が往々ニシテ此税ノ延納及分納ヲ規定シタトイフ。<sup>24)</sup>

(註二〇) こつさハ曰ク、相續税ガ相續人ノ財産元本ヲ減少シナケレバナラヌトイフ主張ニ絶對ニ對立スルコトハナイ。何トナ  
レバ國庫ニ拂ハルル資本ヲ再ヒ生ズルノ可能ハ、相續人ノ精神的及道義的性質其者ノ方便及慣習ニカカリ、租税ノ素質ニカ  
カラナイカラト。<sup>25)</sup> 尙ホ實際ニ於テ注意深キ人々ハ其相續人ノ普通ノ場合ニ納ムヘキ相續税額ダケ保險チカケテ置ク所アル。  
此ハムシロ被相續人ノ良好ナル精神状態ノ爲メニ此税ガ財産元本ヲ侵蝕セサル場合デアル。

(二) 次キニハ假リニ右列記條件ガ凡ヘテ不利デアルナラバ相續税ガ財産元本ヲ侵蝕スルノ外ナ  
キカトイフト、其ハ必スシモ然ウデアイ。(A) 勿論其ハ不利ノ程度ニモ依ルコトデ、一概ニイフト

得ヌコトデハアルガ其ガ普通ノ程度デアルナラバ、相續人ハ概シテ其相續財産ヲ維持シヤウトシ、

19) Heckel, a. a. O. S. 421. Cohn, a. a. O. S. 297. Hommelsheim, a. a. O. S. 7. 24-5. Walcker, a. a. O. S. 56.  
20) Inheritance tax laws. (61st Congress. 1st Session. Doc. N. 111) P. 8

租税ヲ出來ルダケ所得ヨリ拂ハウト努ムルモノデアリ(註二二)、直チニ其税ヲ其財産ノ所得又ハ他ノ所得ヨリ拂フコトガ出來ナケレバ暫ラク其財産又ハ他ノ財産等ヲ經濟市場ニテ擔保ニ供シ以テ借入レラ爲シ得タル金ニテ納税シ、順次其財産ヨリ生ズル所得又ハ其他ノ所得ニテ即チ努力ト貯蓄トノ結果ニテ借金ヲ返濟スルコトガ出來ル。ツマリ相續税ガ彼レ相續人ノ箇人的財産ヲ侵蝕スルコトナキヲ得ル。

(註二二) しあんつハ一般ニハ各人ハ其財産ヲ維持シヤツトシ、租税ヲ所得ヨリ拂ハント努ムルモノデアルトイフ。(26)

B) 或ハ一步ヲ進メ、條件カ一層不利デ、相續人ニ於テ其相續財産ヲ賣却シテ此税ヲ納ムル外ナキコトガアツタニシテモ、ソシテ相續税ノ場合ニハ動モスルト相續人ガ此税ヲ其特別ナル努力貯蓄ニヨリ出サザルコトトナル。特ニ遠親無親族關係者ノ場合然リデアル(註二二)。隨ツテ相續財産ヲ賣却シテ納税スルコトガアル。此場合ニ於テ果シテ國家ガ相續財産隨テ財産元本ヲ浸蝕シタリトイフヘキヤガ問題デアル。(い)併シ其實却サレタル財産ハ結局經濟市場ニテ多クハ他ノ一層有益ニ使用シ得ル人ノ手ニ移リテ利用セラルルコトニナリ、兎モ角相續財産ハ矢張り一ノ財産トシテ存續使用セラルル。尤モ從來被相續人ガ自ラ農商工業ニ從事シ、之ニ使用シタル財産ニツキ相續人が納税ノ必要ニ迫マラレテ之ヲ賣却セザルヲ得ザルコトトナリ、爲メニ其被相續人ヨリ繼承シタル營業又ハ其他ノ企業ヲ廢止シ又ハ縮少シナケレバナラナクナルコトニヨリテ損害ヲ生ズルコト

24) Pfeiffer, Die Staatseinnahmen. II. S. 326. Scheel, a. a. O. S. 73. Roscher,

a. a. O. S. 434-5.  
25) Cassa, Grundriss d. Fw. S. 102

ハ認メナケレバナラヌガ、併シ其ニシテモ其財産ヲ買取りタル他ノ人、其ハ寧ロ概シテ相續人ヨリモ一層有能ナル人ガ其ヲ利用スルコトニヨツテ生スル利益ヲ願ミルニ於テハ、全體上太シキ損害トハ認ムルヲ得ヌ。而シテ其賣却サレタル財産ノ代金トシテ支拂ハレタルモノハ、其買手ガ他ノ方面ニテ得タル所得ノ一部デアリ、彼トシテハ此財産ヲ買取ルコトニヨリテ、多クハ此ニ一ノ放資ヲ爲シ、隨フテ貯蓄ヲ行フタコトニナル。勿論其財産ガ全ク非收益的ナル財産ノ場合ニハ、或ハスクイフコトガ出來ナイニセヨ(註二三)、彼ノ所得ノ一部ヲ以テ之ヲ買取りタルコトハ確カデアル。ツマリ此場合ニハ相續稅ガ納稅義務者タル相續人ノ所得ヨリ拂ハレナイデ、其財産ヲ買得者タル他ノ人ノ所得ヨリ拂ハレタルコトニナリ、國民經濟上ヨリ見レバ矢張り相續稅ガ所得ヨリ拂ハレタルコトニナル。(ハ)ソシテ又政府ニテ得タル相續稅收入ヲ以テ、假令其ト他收入トノ區別ガ困難デアルニセヨ、其レダケ位、國債償還ヲ爲シ居ルトスルバ、其場合ニハ此ガ國債所有者ノ手ニ落ち、少トモ其一大部ハ之ヲ彼ニ於テ資本トシテ經濟上有益ニ使用スルコトトナル(註二四)此ガ一部ノ人ノ考フルホド全ク然リトハイヘヌニセヨ、一部斯カルコトニナルノハ想像サルル所デアル。此點ヨリ見レバ相續人ノ資本ハ減ズルニセヨ、他方國債所有者ノ資本ガ増スコトニナリ、國民經濟上ニ於ケル資本ノ減少トイフコトハ差引キシテ少キモノトナリ、又ハ全ク之ナキコトニナル。尤モ相續稅收入ガ必スシモ國債償還ニ向ケラルトハ限ラズ、又之ニ向クルノガ不可トモ

イヒ得ル(註二五)。然ルトキハ夫ノ收入ガ國家ノ一般ノ經費ニ充テラルルコトトナルトシテ、此ハ多クハ不生産的ノモノトイハナケレバナラヌガ、併シ其モ間接ニハ生産ヲ進ムルコトニハナリ、資本ノ増殖ヲ促スモノトハイヒ得ル。(ニ)或ハ之ヲ以テ資本ノ増加ニ貢獻シタトイヒ得ナイ場合ガアルニセヨ、兎ニ角其相續税收額タケハ政府トシテハ國民ノ所得ノ中ヨリ隨ツテ其資本トナルヘキモノノ中ヨリ取ツテ往カナクテハナラヌ。相續税ヲトラヌカラトイフテ、國民所得ガ之ヲ免ルルヲ得ヌ。此税デナケレバ何カ他ノ税デ取ツテ行カレナケレバナラヌ(註二六)。而モ此税デアルガ爲メノ故ニ他ノ税ナルト異ツテ特ニ國民ノ財産ヲ侵蝕スルトハイフヲ得ナイ。其ガ特定ノ箇人ノ財産又ハ資本トナルヘキモノヲ減少スルコトニナルトモ、此税ナルガ爲メノ故ニ、特ニ國民ノ財産又ハ國民ノ資本トナルヘキモノヲ減少スルトハイヘナイ(註二七)。ムシロ此税ハ一ノ財産ヲ或主體ヨリ他ノ主體ニ移スモノトイフニ過キヌ。或ハ(稀ナル場合デハ)アラウガ、相續財産ハ其之ヲ收得シタル相續人ニ於テ浪費スルコトトナルコトモアル。斯カル場合ニハ初メヨリ資本又ハ資本タルヘキモノノ破壊ガアリ(註二八)、相續税ノ爲メニ特ニ此破壊ヲ増加スル譯デナク、ムシロ此税アルガ爲メニ、此税ナカリセバ夫ノ破壊ニ向フヘカリシモノヲ有益ナル國家的使用ニ向ハシムトイフヘキ場合サヘアル。

(註二二) 之ニツキラハ此税ガ其高キ額ノ爲メニ財産元本ヲ侵シ、年々ノ租税ノ如クニハ貯蓄ノ刺戟ヲ與エナイ。其ハ特ニ

各人が其一度拂へル租税が決して再ビ獲得せザルコトヲ知ルカフトイヒ、又いへるハ此税ハ固有ノ勞働ニヨリ取得サレズシテ往々ニシテ全ク偶然ニ歸スル所ノ財産ヲ課税スルノ故ニ、相續人ニ於テ通例租税ニヨリ取ラレル額ヲ回復スルノ刺戟ヲ缺クトイヒ、べるぎうすハ各人が酒税及住居税ニヨリ百たいらーヲ取ラレルトキハ、恐ラクハ此支出ヲ貯蓄ニヨツテ少クトモ一部充タステアラウ。彼が一層安キ處ニ往ヒ、又ハ一層少キ酒ヲ飲ミ又ハ其他何ヲ制限スルコトニヨリテアアル。併シ彼二千たいらーノ財産が歸シタルノ故ニ、百たいらーガ相續税ニヨツテ取ラレルトキハ、彼ハ恐ラクハ相續財産ヲ九百たいらート計算シ隨テ其支出ヲ制限スルコトニハナラステアラウ。此場合ニハ租税が全ク資本ヨリ拂ハルルデアラウトイフ。かかるぎー、ぶあいふわー、ばすてーぶる、こつさモ類似ノコトヲ説ク。ばりゆーモ亦々此税ノ重ナル非難トシテ、代リヲ作ル爲メニ盡方ヲ生スルコトナシニ、又活動及簡約ヲ刺戟スルコトナシニ資本ノ上ニ落ツルコトヲ擧クル所デアアル<sup>28)</sup>

(註三) 骨董品ノ如キハ非收益的財産ニ數エラルルガ、實際斯種ノ物ハ其價格ノ騰貴ノ中ニ可ナリ大ナル所得ノ落ンデ居ルモノ故、ムシロ收益的財産トイフヘキデアアル。

(註四) みるハ之ニツキ曰ク、相續税が資本ノ上ノ税ナリトイフ説ハ、國債ヲ有テ其償還ノ爲メニ收入ノ一部ヲ向クル所ノ國ニ適用スルコトガ出来ナイ。何トナレバ租税ノ收額ガ斯ノ如クニシテ尙ホ資本トシテ止マリ、單ニ納税者ヨリ公債所有者ニ移サルルニ止マルカラト。此言ハべるぎうす、ぶあいふわーニモ用非ラレル<sup>29)</sup>

(註五) ふなつけハ曰ク、此使用(相續税)收入ヲ國債償還(ハ)決シテ生ジナカッタ。又生ジナイデアアラウ。此税ノ收入ハ單ニ經常收入ニ入り經常歳出ノ爲メニ使用セラルル。負債償還ガ起ルトモ、此ノ勞働ヲ進メ高キ收益ヲ擧ゲ自ラ増加スル國民財産ヲ、低利ナル且ツ貨幣價值ノ下落ト共ニ自ラ減少スル所ノ國債ノ償還ノ爲メニ使用スルハ不真ナル經濟政策デアアル。負債ハ規則正シクハ唯ダ所得ノミヨリ償還サルヘキデアアル<sup>30)</sup>

(註六) ぶあいふわーハ曰ク、國家ガ相續税ニヨリテ數百萬金ヲ擧ルトスレバ、之ニヨツテ一方ニ其レダケ資本ヲ取去ルヘキデアアルガ、他方ニ其レダケ税ヲ少ク拂フコトニナリ、全體ガ之ガ爲メニ其レ丈多クノ資本ヲ貯蓄スル可能ヲ得ルコトナル。故ニ國家ガ取去ルモノハ少クトモ大部分他方ニテ再ヒ集メララル所デアアル<sup>31)</sup>

論說

相續税ト財産課税(二)(完)

28) Rau, a. a. O. II. S. 27. Eberberg, a. a. O. S. 311. Bergius, Grundsätze d. Fw. S. 262-3. Ricardo, Principles of P. E. and Taxation. Ch. 8. Pfeiffer, a. a. O. S. 325. Bastable, l. c. p. 592. Cossa, a. a. O. S. 101-2. Parieu, l. c. p. 139.

29) Mill, Principles of P. E. B. V. Ch. II. §. 7. Bergius, a. a. O. S. 263.

(註二七) わぐな一ハ曰ク、箇人經濟的意義ニテノ資本税ハ必然ニ國民經濟上ノ意義ニテ此ノ如キモノトナルヲテナイト。實際相續税ノ爲メニ國民財産又ハ資本ノ減退ヲ患フルニ至ル程ノコトハナイ。べるぎうすハ之ニツキ財産ノ大増加アル國テハ頗ル高キ相續税ノ年々ノ收額ハ年々ノ資本増加ノ唯頗ル小部分ヲ成スニ止マルトイヒ、ばすて一ぶるハ現在ニ於ケル相續税ノ資本ノ上ノ壓迫ハソソクニ明瞭ヲナイ。英佛ノ此ニ於ケル收入ハ年々ノ貯蓄額ノ一小部ニ過キナイ。(六又ハ七%ヨリ多カラハ) 此金額ガ貯蓄ニ加ヘラルルコトヲ想像スルトモ、結果ハ重要ヲナイテアラリト。<sup>32)</sup>

(註二八) ぶあいふあいハ曰ク、左ナクトモ、爾ク豫期シナイ所ノ財産ノ流入ハ決シテ一般ニ其利殖サルルコトトナルト限ラナイ。相續税ナクトモ、各人ハ少クトモ相續財産ノ一部ヲ其娛樂ノ爲メニ支出スルトニ傾キ、之ニヨリ一様ニ資本ノ破壞ガ生ズルト。<sup>33)</sup>

## 結 論

要之相續税ハ普通ノ財産税ト異ツテハ居ルケレトモ、而モ財産元本ヲ捕捉スル趣旨ヲモ持ツテ出來タルモノナルコトハ争ハレナイ。唯タ併シ其課税ノ結果カラ見ルト、箇人經濟ヨリ見テハ其財産ヲ侵蝕スルコトガアルニモセヨ、國民全體カラ見レバ結局何人カノ所得ヨリ出サルルコトトナリ、特ニ相續税ナルガ爲メノ故ニ、其所得又ハ資本タルヘキモノヲ一層多ク侵ストインコトトハナイ。況ヤ箇人ヨリ見テモ別ニ其財産ヲ侵サズ、其所得ヨリシテ出サルルコトトモナリ得ル。故ニ此税ガ特ニ財産元本ヲ侵蝕スルモノ也トノ理由ニテ此税ヲ否定スルハ過キテ居ル。其ハ餘リニ皮相ノ判断トイハナケレバナラス。此税ガ特ニ國民經濟ノ發達ヲ阻碍スルトイフ程ノコトハナイ。ムシロ他ノ生産取引ニ直接ニ觸ルル所ノ税ヨリモ斯カル弊害一層少シトイフヲ當レリトスル。

<sup>32)</sup> Wagner, a. a. O. S. 590. Bergius, a. a. O. S. 263. Bastable, I. c. p. 607.

<sup>33)</sup> Pfeiffer, a. a. O. S. 326.